
殺人者のブログ ~ Murder's log ~

頼白井

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

殺人者のブログ ~ Murder's log ~

【Nコード】

N6617A

【作者名】

頼白井

【あらすじ】

多数の殺人犯が、殺人の様子を書いたブログ。誰が作ったのか？なぜ殺人犯はブログを書けるのか？謎だらけのブログを、新聞部の高校生二人が調査する！

殺人者のブログ ~ Murder's log ~

(前書き)

この物語はフィクションであり、人物、地名、事件、ウェブサイト等は総て架空の物です。

六月六日

彼女を殺した。

アイツが悪いんだ。 別れようなんて、言うから。

首を絞めた。

細かった。

すぐに、動かなくなった。

醜い顔、天罰だ。

放課後、新聞部の部室には二人、生徒がいた。部活動としては少ないが、これで出席率100%である。

「ねえリユート、『マードーズ・ログ』って知ってる？」

髪を短めにした、活発そうな女子高生が、パソコンを操作している男子高生、桜井龍人さくらいりゅうとに話かけた。

「名前だけ聞いたことがある」

シャープな印象の顔をパソコンのディスプレイに向けたまま、龍人は簡潔に答えた。

「じゃあ、内容は知らないんだ？」

ようやく龍人は女子高生に顔を向ける。

「いまツクシに聞くまで、名前すら聞いたことが無かったからね」
女子高生、春日ツクシ（かすが つくし）は、軽く龍人を睨みつける。しかし、龍人はまったく気にしない様子で、ディスプレイに再び向き直る。

「で、その『マードーズ・ログ』ってサイトのURLは？ ああ、HTTPはいらないから」

龍人はインターネット・ブラウザを開き、アドレス入力の準備をする。

「……コロン、スラッシュスラッシュ、エム……」

「コロンとスラッシュ二つを言ったのは、ツクシのささやかなイヤガラセだろう。」

「ツクシがURLを言い終わるのとほぼ同時に、ディスプレイには“マードーズ・ログ”という日記風ウェブサイト、いわゆるブログが表示されていた。」

背景は黒で、文字は赤。

「いかにもな雰囲気なデザインだ。このデザインのために読みやすさを度外視したのだろう。」

「妙にロード時間の長い画像があると思ったら、十字架の中心に目玉という悪趣味な物で、さらに目玉がキョロキョロ動くというアニメーションGIFだった。さらに、その画像は、画面をスクロールしてもついてきて、常に画面左に表示されている。」

「ねえリユート、ひとつ訊いていい？」 ツクシは龍人の肩越しにディスプレイを見ながら尋ねた。

「『ログ』なんて言葉は、一般的にネットくらいでしか聞かないからね。数学のlogなんて、覚えてる人は少ないよ。」

「またもツクシは龍人を睨みつけることになった。質問する前に答えられたのだから、仕方ない。」

「『六月六日』日付は昨日か『彼女を殺した。アイツが悪いんだ。別れようなんて、言うから。首を絞めた。細かった。すぐに、動かなくなった。醜い顔、天罰だ』なんだ？ この文章力の欠片もない文章は」

龍人はブログの内容を読みあげ、そして文章に文句を言った。

「さあ？ こーゆー文章が、詩的で良いつて思ったんじゃない？ でも、この記事は昨日見たときには無かったよ。」

「新聞部に所属している二人にとって、稚拙な文章にしか見えないのは仕方がない。とはいえ、内容は新聞部員として惹かれる物であることも事実だ。」

「まあ、記事にするかどうかは別として、調べてみる価値はあるな」「記事にしないの？」

ツクシは不満そうだ。

「俺としては記事にしてみたけれど、校内新聞には掲載できない可能性が高い。このブログが真実であれデタラメであれ、コレを見て殺人衝動を覚えるヤツだって出てくるかもしれない。そんなサイトを紹介するようなマネはできないな」

テレビゲームやマンガの影響で殺人を犯す……とされる世界に、そのものズバリ、殺人体験日記など紹介するほど愚かではない、ということだ。

「じゃあ、記事はどうするの？」

「校長のカツラが何種類あるか、細部までまとめた記事があるから、それを使う」

イザというときに使えるよう、代替記事を用意してある。

「なに……このギャップ……」

「キヤップは帽子。カツラはウィッグだ」

「ギャップって言ったんだけど？」

「うん。知ってる」

そんな冗談を交えつつ、役割を分担して調査を開始した。

ツクシは、前日にブログを一通り読んでいたので、実際にその事件が起きていたのかをチェックし、表にまとめている。

龍人はブログを一通り読むことから始めた。

「一番最初は今年のバレンタインか」

「最初から読んでるの？」

「ああ、ブログの構造上読みにくいけど、この方がいい」

ブログは日記の最新のページにシオリが挟まっているようなもので、普通に読み返そうとすると、最新から近い順。日付を逆行しなければならぬ。

『二月十四日。バレンタインに彼殺す。私以外の女から、チョコをもらって喜ぶ笑顔。私が好きなその笑顔。私以外になぜ向ける？ だから殺した、愛する彼を。愛していいのは私だけ』って、これ

ントがないから、事件後に誰かが日付を偽って書いた物……って可能性もあるね」

トラバ、トラック・バックのことで、他のブログがこの記事を紹介したか、という物だ。

たとえば、トラック・バックをしたブログの記事が逮捕前の物であれば、この記事の信憑性が高まる、ということだ。コメントも同様だが、管理者が日付を変更してしまえば、あまり意味がない。もちろん、変更できない部分だが、トラック・バック先と違って同じサーバのデータなので、改竄は比較的容易だ。

「でも、一つだけ、いつ書かれたか分かって、それでまだ発覚していない事件があるよ」

ツクシはもったいぶっているが、結局龍人もその記事は何か分かっている。まあ、ツクシも“リユートは分かっている”と思っているように。

「昨日の記事のことだろ」

との答えにも、悔しそうではない。

「うん。私が昨日見たのは八時くらい。全部読むのに一時間くらいかかったけど、その後ページ更新してもこの記事はなかったね」

「つまり、九時過ぎから……まあいいか、分かっているな。『昨日の記事の事件』がニュースで流れたか流れてるか流れるかのチェックよろしく」

「リユートがやってよ」

「役割分担しただろ。ツクシの仕事は『ブログの事件が起きたかどうかのチェック』だろ？」

ツクシは、黙ってテレビの電源をいれた。ボリュームをいっぱい上げたのは、龍人に対するイヤガラセだろう。しかし、あまり効果はないようだ。

『東京都石田市の石田中央公園で、女性の遺体が発見され……』

テレビから流れてきた女性アナウンサの声を聞いたツクシは、龍

人に

「この事件……」

と、言いかけるも

「聞いてるから、静かに」

龍人にたしなめられる。しかし、龍人も、この事件が昨日の記事の事件であると確信しているからこそ、ニュースを聞こうとしているのだ。

『亡くなられたのは、石田市に住む高校生、綾瀬美樹さん十六歳。死因は頸部圧迫による窒息と見られ、死亡推定時刻は昨夜十時頃。警察では、綾瀬さんの携帯電話に残された発信履歴から、交際していた少年が、事件になんらかの関与をしている物とみて捜査を続けております』

龍人は目当てのニュースが終わると、もうテレビに興味は無いと言わんばかりに、ディスプレイに目を落とす。

「この事件だね。きっと」

龍人の目はディスプレイに向いていても、口はツクシに向いているようだ。

「そーみたいだね。ブログの更新時間と、死因、あと、付き合ってた子が犯人だとかね」

「少年は逮捕されてないから、犯人とは断言出来ないけど……ほぼ間違いないな。だから、このブログの内容は、ほぼ間違いない各犯人が記述したものと考えていいだろう」

それでも“ほぼ”をつけるのは、ほんのわずかでも他の可能性があるあるからだ。

「書いたの犯人じゃなかったら……あ！もしかして、ブログに書くと、その通りの事件が起きるとか！」

「ああ、そんなマンガがあったな。つてーと、管理人は死神だな」

「リポートかもよ」

「俺は最後が『ト』だ。『ク』じゃない」

「言いたいこと、よく解ったね……」

「……………なんとなく、な」

いままでに記述された事件、計二十七件を調べた結果、その総てが実在の物と言って差し支えない、と、彼らは判断した。

「それにしても、このブログは滅入る」

「リユートも滅入ったりするんだ？」

常に冷静な龍人を見ているツクシにとって、泣き言を呟く龍人は新発見なのだろう。

「文もさることながら、スクロールしてもついてくるこの目玉が嫌だ。なんか気になるし、監視されてる感じがする」

雰囲気を出すという意味では成功だが、やりすぎ感否めぬ。

「ウィンドウ小さくして隠そうとしたけど、これだけは隠れないのね」

「プログラム・ミスだろ。スタイルシートで表示位置指定したら、こうなったただけだろうけど」

「イヤなプログラム・ミスだね」「ま、それはいい。……………で、事件は全部犯人が違うけど、共通点があるよな」

二人とも共通点に気付いているとの再確認をする。

「はい！どれもこれも恋人を殺してます！」

「……………身も蓋もない……………けど、そうだね。犯人の性別、犯行時間、殺害方法は違っても、被害者は恋人で、さらに『別れ』や『浮気』

……………少し広く言うと、関係の悪化が絡んできるといふ点が共通している。さらに、殺害後にブログを書いたということも共通点だな」

「ブログに書いてあるんだから、そーに決まってるんじゃない」

ツクシは“そんなの当たり前”と言わんばかりの口調だ。

「ブログを中心に考えれば、ツクシの言うとおり。でも、個々の事件として考えると、二十七人も犯人達が、一つのブログに記事を書いているという事は、異常としか言えない。となれば、『ブログを書く前に逮捕された人』だって、いるかも知れない」

「……………言われてみれば、そーね。それに、普通、記事を書くにはパ

「スワードがないと書けないから、そこも異常よね」

「ああ、どこにも見当たらないのに、二十七人が書けてるんだよね……」

数人が集まって、一つのブログを管理しているということも一般的ではあるが、それとは明らかに違う。

「殺人を犯した人には、パスワードが見えるとかっ！」

「……なんだ？ いま『ひかりごけ』って言葉が思い浮かんだぞ？」

「『ひかりごけ』ってなに？」

「自分で調べる。一応言っておくが、未来の世界のネコ型ロボットのポケットから出てくる道具は『日光ゴケ』だ。って、『』が連続したな。ともかく、その意見は無視できないな」

「……へ？ ドラちゃん？」

一気に巻くしたてられ、ツクシは混乱しているようだ。

「……違う。『殺人者』には、パスが見えるんだよ、きつと」

「どゆこと？」

「あくまで可能性だ。だから、調べてみるんだよ、これから、ね」

「……えーっと、まさか……殺したりしないよね？」

ツクシは、龍人の発言に、不適な物を感じたようだ。

「まったく、こんなところに隠してるとは」

「だから、ずっと左にあったのね」

二人が使っているソフトはインターネット・ブラウザではない。

新聞に掲載する写真を加工するために使っている、フォトレタッチソフトである。

フォトレタッチソフトのウィンドウには例の目玉が動く画像が、アニメーションパターンの計四種類表示されていた。ただ、背景の黒地部分に、文章が書かれている。

「黒バックに溶けこむ、微妙に違う黒で書いておくとは……」

普通ならば目立たないどころではなく、ただの背景にしか映らな

い。だが、少しでも色が違えば、フォトレタッチソフトで浮かび上がらせることは簡単だ。

「お前の恋人を殺せ」

「殺人の記録をつける」

「パスワードは“goldam”」そして、最後の一枚には、マードーズ・ログとは違う、あるURLが書かれていた。

「リユート、こんなので、人を殺すのかな？」

「サブリミナルは知ってるだろ？」

「うん」

サブリミナル、潜在意識に指示を与え、相手を操ることだ。映画に於いて、僅か三十分の一秒という短い一瞬に、炭酸飲料を飲んでいる写真を挿入したことで、その映画を観た人が、その炭酸飲料を飲みたくなったというエピソードがある。「普通は、殺人という『種の保存に反した行為』に対しては、潜在意識レベルになるほどブレキがかかる。でも、気持ちが揺らいだとき、『殺人』側に転ぶ後押しになる場合がある」

「ホント？」

龍人の説明に、ツクシは疑わしそうだ。

「仮説だけどね。でも、明らかにサブリミナルを狙った隠し文字があつて、それを常に表示させといて……そして、実際に恋人を殺した人間が二十七人もいる」

「でも、記事を書いた犯人が、このブログを見てたかどうかは……」ツクシは疑問を言いかけて、何かに気付いたかのように、口をつぐんだ。

「『マードーズ・ログに記事を書くという発想を持つ犯人が、マードーズ・ログを読んだことがあるかどうか解らない』なんて、変なこと言いそうになつただろ？」

「だから……やっぱり……」

「ああ、別れ話なり浮気なりで、『恋人を許せない』という心理状態になつたとき。サブリミナルで散々見てきた『恋人を殺せ』とい

う指示を実行してしまつた……」

それでも、殺人という一線を越える人は稀である。しかし、悲しいことに、二十七人も人間が、越えてしまつている。

「誰がこんなことを……」

「それは、このサイトに書かれてるんじゃないかな？」

龍人はインターネット・ブラウザを立ち上げ、画像に隠されていたURLを打ち込む。

ちよつとした読み込み時間の後、マードーズ・ログとは打つて変わつて、なんの演出もない、白バックに黒文字の味気ないページが表示された。

龍人とツクシは、そのページに書かれた文章を黙読する。

『このページを見てるアナタは殺人者のはずだ。あんな仕掛けで殺人を犯すとは思えないけど、これを見てくれてるなら、無い話でもない。アナタは男か、女か、解らないが、恋人を殺した。ボクの仕掛けに後押しされたかも知れないけど、これはアナタの罪だ。殺人教唆？ それでもボクは裁かれない。なぜなら、このページを作つた後は、死ぬだけだからだ』

「被疑者死亡のまま送検してえ……」

もちろん、龍人は警察官ではないので、送検はできない。

『そうだ、忘れていた。名乗っていなかったね。ボクは酒井俊哉』

そこに書かれていた名前に、二人は驚愕する。

「酒井俊哉って……」

「ああ、コイツがマードーズ・ログを遺したつてことか」

『ボクを殺害した事件が報道されるかは、ボクが生きている間には解りようがない。しかしキミは知ってるはずだ。マードーズ・ログの最初のブログ。その被害者になる予定だよ』

酒井俊哉、バレンタインの事件の、被害者。

『最初のブログだけはボクが書いた。すでに、彼女に暗示をかけてある。そしてブログどおりにボクを殺してもらつつもりだ』

「なるほど、バレンタインの記事に『動機』は書かれてたけど、『

『殺害方法』は書かれてなかった。彼女がコイツをどう殺すかまでは、操りきれないってわけだ」

『これはゲームだよ。ボクが作った、最高のゲームだよ。これからもマーダーズ・ログから生まれる殺人者はいくらでも出てくる。世界よ、混乱しろ』

二月十三日という日付と、酒井俊哉の署名で締め括られていた。「そんなこと……」

ツクシは言葉に表せないほどの怒りに震えている。

龍人はマーダーズ・ログを開き、パスワードを入力し、ブログを書き始めた。

「ちよ……リユート、何してるの？」

手早く書き終えた龍人は、ツクシに顔を向ける。

「滝の上で男と争ってたら一緒に落ちてしまった。けど、俺はバリツを習得してたから助かった。でも、男を殺してしまった……って内容の文を書いただけだ」

解る人には解る、明らかにフィクションの文章。

「そんな探偵小説みたいなこと書いてどうするの？ ブログの信憑性を無くすとか？」

「いや、このブログも声明文も、軽く消去するつもりだから別に信憑性は、いい。ただ、犯人たちが声明を読んだかが気になったんでね」

「……なんで？」

「そしたら、この通り。ログイン画面にも、編集画面にも、編集後の画面にも、どこにも声明文へのリンクがないんだよ」

つまり、声明文のページに行くには、画像に隠されていたURLを直接入力する以外にない、ということだ。

「それで何が解るの？ どこにもリンクがないからって、入力すれば見れるんだから意味ないよ？」

実際、二人はその方法で声明文を読んでいる。殺人者たちも、同じ方法で読んだのではないか、と言いたいのだろう。

「犯人たちは声明を見てないよ。理由は二つ。一つめは、このサイトが誰でも見れる状態にあること。逮捕された犯人たちが、このサイトのことを警察に言っていないってことだな。これは後で調べるけど、同じ方法かなんかで、口止めしてるかも知れないし、警察も犯行後のことはあまり聞いてないかも知れない」

このサイトが警察に知られたとしたら、たちどころに閉鎖されてしまうだろう。だが、閉鎖されていない。

「警察が知らないのと、犯人が声明を見てないのって、どう関係してるの？」

「あの声明を見たら、『マードーズ・ログに操られた』って、警察に言うだろう。そしたら、警察も少しは調べる。声明だって読むだろう。そうなれば、ここは重要視されて、閉鎖だ」

「声明のことも口止めしてるんじゃない？」

「俺がお前を殺人者にしてやった。ザマーミロ」って声明を読んだヤツに、『このサイトせいだ、と言うな』なんて言ってもムダだろ？ 暗示に、そこまでの強制力は無いよ」

暗示は、AとBで迷ったときに、どちらを選択するかを操る程度。あのような声明文を見せられては、暗示があっても、サイトのことを語るだろう。

「な……なるほど……じゃあもう一つは？」

「わずか六文字のパスワード程度なら、サブリミナルで伝えられるかもしれないけどさあ……」

龍人は視線を声明文に向けた。

「酒井さん。こんな長いURLを伝えられると思ってたら、あなたはサブリミナルを過信してる」

結局、マードーズ・ログについて調べたことは、校内新聞への掲載を取り止めた。危険である上に、龍人がマードーズ・ログと、酒井俊哉の声明文を削除するつもりだからだ。

「今日は疲れたなー。なんか甘い物食べたいなー。そーいえば、駅前に新しいクレープ屋さんが出来たね。誰かおごってくれないかなー」

部室には、他に龍人しかいないというのに、ツクシは大声で独り言を言っているようだ。しかし龍人は特に気にする様子もなく、帰り支度と戸締まりの確認をしている。

「ツクシ、鍵をかけるから、早く出てくれ」

「……誰かおごってくれないかなー……」

ツクシは、それでも上目づかいに龍人を見つつ、独り言を呟いている。

龍人は問答無用と言わんばかりに、ツクシが部室にいるにも関わらずドアを閉め、鍵をかけた。当然内側から開けられるので、すぐにツクシが出てくる。

「ちよつと！ 無視したりドア閉めたり、ヒドイじゃない！」

「やけに大きな独り言だと思ってたけど、俺に言ってたの？」

「もう！ ブン屋は耳が命なのよ？」

「情報が必要か否かを選別するのもブン屋の命だね」

龍人は、改めて部室に鍵をかけ、足早に移動を始める。

「ちよ……ちよつと……」

龍人は歩みを止めない。

「うう……今日は諦めようかな……」

ツクシがそう呟いたとき、龍人が立ち止まった。

「ああ、そーいえば」

突然喋り始めた龍人に、ツクシは顔を向ける。

「最近駅前にクレープ屋が出来てやたら宣伝してたり、誰かがクレープクレープうるさくてな。それで思ったんだけど、ブログのネタがボツだから、クレープ屋の特集にでもしようか？ 校長のカツラはいつでも使えるし、よりタイムリーなネタだと思うんだが……」

ツクシは満面の笑顔で、何度もうなずく。

「そうか。でも、ツクシは疲れてるんだろ？ 取材は明日からに……」

殺人者のブログ ~ Murder's log ~

…
」

「大丈夫大丈夫！ 行こ行こ！ すぐ行こ！」

龍人はツクシに連れ去られるように、下校することになった。

(後書き)

「殺人者のブログ」をお読みいただき、ありがとうございます。
作者の類白井カルカロトンです。

内容は……気が付けば説明文になって……るような、なっていないよ
うな。一応、龍人よりも早く謎解きできるように作ってある……と
思います。……と、曖昧表現はともかく、感想等いただけますと、
今後の励みになります。良いなら良い、悪いなら悪いと、はっきり
言っていただきたく思います。よろしくお願いします。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6617a/>

殺人者のブログ ~ Murder's log ~

2009年7月2日03時57分発行